

# PAC 分析学会

## 第8回大会

### プログラム・発表抄録集

2014年12月13日(土)・14日(日)

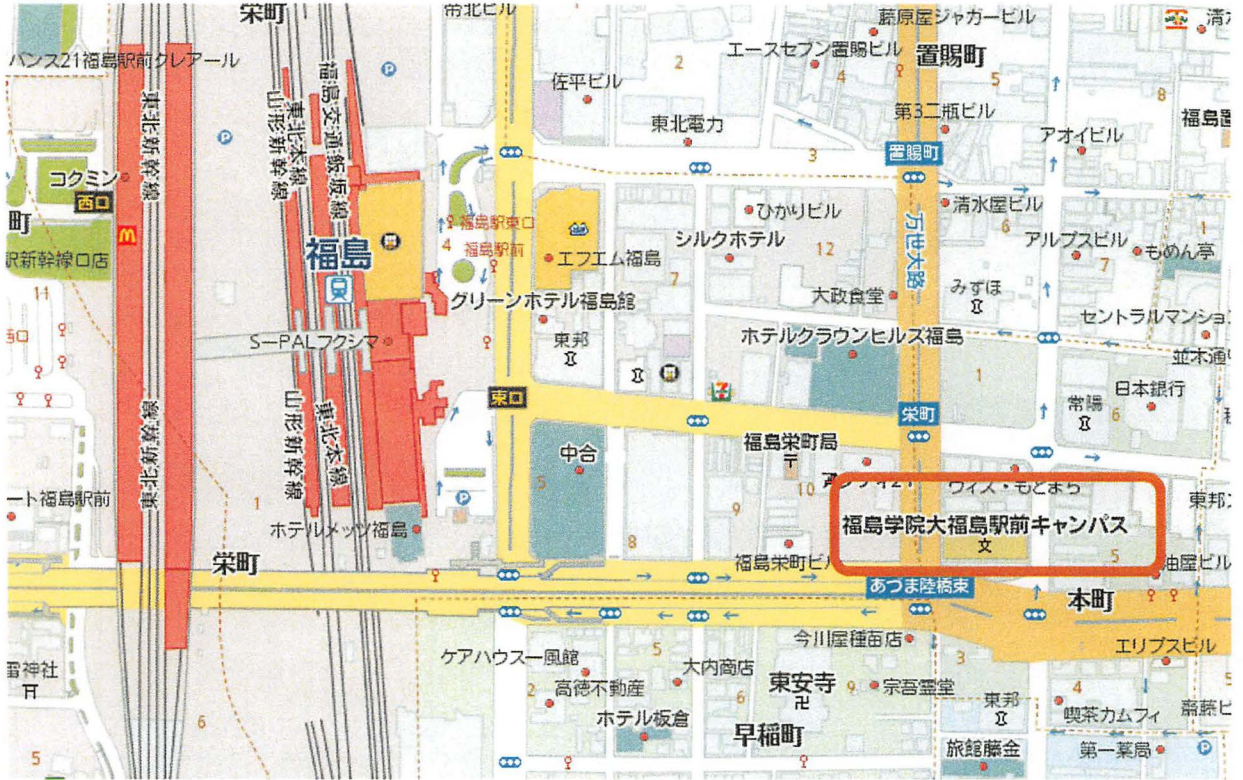


福島学院大学

# 大会会場へのアクセス

## 福島学院大学福島駅前キャンパス

〒〒960-8505 福島市本町 2-10



### ● 東北新幹線、阿武隈急行、東北本線利用の場合

「福島駅」下車 東口改札から徒歩 5 分

### ● 飛行機利用の場合

仙台空港→仙台空港線で仙台駅まで→新幹線で仙台駅から福島駅  
時間はかかりますが、在来線の東北本線も利用できます。

福島駅から

### ● JR 福島駅東口より徒歩 5 分

### ● 福島交通バス「大町」より徒歩 1 分

# 駅前キャンパスには駐車場がありません。お車での来場の場合は、  
近隣の有料駐車場を利用させていただくことになります。

## 大会参加者へのご案内

### 1. 受付

受付は大会会場（E516 教室）前になります。事前に参加希望の連絡をされた方は受付で参加費等をお支払いいただき、参加証とプログラム・発表論文集をお受け取りください。

当日参加の方は当日参加申込書にご記入ください。その後、参加費をお支払いいただき、参加証とプログラム・発表論文集をお受け取りください。

### 2. 喫煙について

所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。（大会開催会場になっている建物内部には喫煙所はございません。）

### 3. 参加証（ネームプレート）について

参加証はお帰りになる際にお返しいただきますよう、お願い申し上げます。

### 4. 大会参加費について

本大会の参加費は以下の通りです。

学会員：一般会員 2000 円

学生会員 1000 円

非会員（当日一般）5000 円

非会員（当日学生）1500 円

懇親会参加費用：実費（懇親会場にてお支払いください）

## 発表者へのご案内

1. プログラム・発表論文集への論文掲載に加え，発表会場での発表（ポスター発表）によって正式発表と認められます。
2. ポスターの掲示時間は2時間（ポスター発表 A および D は1時間），在籍責任時間は1時間となります。
3. 責任発表者が欠席した場合，発表取り消しとなります。連名発表者がいる場合には，大会事務局の承認を得て発表を代行することができます。
4. 当日配布資料がある場合にはその旨ご連絡ください。資料の印刷は大会会場ではできませんので，発表者が用意していただきますようお願いいたします（資料は30部程度ご用意願います）。

## 大会行事

12月13日(土)

時間	事項
13:30	受付
14:00	開会の辞
14:10	ポスター発表 A カウンセラーの方言使用による相談者の意識構造の変化 ○近藤和也(福島学院大学大学院心理学研究科)・内藤哲雄(福島学院大学)
	休憩
15:30	ポスター発表 B 「ゆとり教育」の受け止め方の共通項目を用いたPAC分析 ～ 共通項目を用いた分析で学生と教師間での差を抽出できるかを検討する ～ 今野博信(学泉舎・室蘭工業大学)  偏見や差別を持つ養護教諭に対するPAC分析—児童・生徒の嫌悪・回避行動の視点から— ○加藤信子(福島学院大学大学院心理学研究科)・内藤哲雄(福島学院大学)
17:30	
18:00	懇親会

12月14日(日)

時間	事項
9:30	受付
10:00	ポスター発表 C コンパニオンアニマルへのフラストレーションと攻撃行動— 飼い猫を対象にしたの PAC 分析— ○内海裕里花(内海メンタルクリニック)・内藤哲雄(福島学院大学) ・七海隆之(福島学院大学)  前任セラピストからみたケース引き継ぎのスキーマについて —15年の臨床歴をもつ心理臨床家の事例から— ○佐藤 佑貴(福島学院大学)・内藤哲雄(福島学院大学)
12:00	
12:20	総会
13:20	(弁当を用意します)
	休憩
13:30	小講演 1 演題:MMIRA (Mixed Methods International Research Association) の動向について—質と量のアプローチの混合— 演者:内藤哲雄(福島学院大学)
13:50	
13:50	小講演 2 演題:混合研究法としての PAC 分析、そして結果の新しい表記法の提案 演者:いとうたけひこ(和光大学)
14:30	
14:40	ポスター発表 D
16:40	一人暮らしの高齢者への支援体制—訪問看護の専門家を対象とした PAC 分析— ○平塚久美子(東都医療大学)・内藤哲雄(福島学院大学)・平塚大智(福島学院大学)

# カウンセラーの方言使用による相談者の意識構造の変化

○近藤和也（福島学院大学大学院 臨床心理学研究科）内藤哲雄（福島学院大学）

key words: カウンセリング・方言・PAC分析

## はじめに

一般に人は、誰かと話すとき、その場に応じた言葉遣いを無意識に、あるいは時に意識的に選択することがある。その選択のひとつに、方言の使用があろう。例えば吉岡(2011)は、方言を活用することに積極的な地方では、方言使用が「ポライトネス・ストラテジー(相手に配慮した言語行動)」としてポジティブに機能するとしている。

近藤(印刷中)は、カウンセラーが相談者との間でラポールを形成し、よりよい関係を構築するための方略として、方言の使用があると考えた。そこで、カウンセラーが方言で応答した場合と共通語で応答した場合とを比較し、方言による応答がどのような効果をもたらすのかを調査した結果、導入部のわずかな応答でもポジティブな効果があることを示した。しかし、これは21の尺度を用いた質問紙による調査研究であり、個人内の意識構造を見るものではない。そこで本研究は、方言を使用する環境に長く生活した人を被験者とし、カウンセラーが方言で応じた場合を想定して、その時にどのような意識構造が見られるかをPAC分析によって調査し、カウンセリングにおける方言使用のあり方を模索する一助としようとするものである。

## 方法

被験者：宮城県名取市在住の、40代前半・既婚の女性で、30代の半ばまではずっと宮城県仙台市内で生活していた。なお、夫も宮城県の出身である。

提示刺激：「あなたがカウンセリングを受けているときに、相手があなたの使い慣れた方言で応じたとき、どんなイメージが浮かんできますか。あなた自身にはどんな感覚や感情が起きてきますか。相手の人に対してはどのように感じてきますか。また、相手の人に対して、どんなふうにかかわりたいという感覚が起きてきますか。そして、相手の人との関係は、どんなふうに変化していくという感覚が生じますか。」

手続き：まず被験者に対し、いつでも実験を中止したり、回答を拒否したりできること、プライバシーに配慮し、公開についても直前まで承諾を取り消せることを伝え、了承を得た。その後、上記の刺激文を印刷した用紙を呈示しつつ口頭で読み上げ、「頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順にカードに記入してください」と教示した。次に、連想反応を記入したカードを重要順に並べ替えさせた後、各項目間の直感的類似度を7段階で評定させた。次いでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由、一部の単独項目での連想イメージと、項目の+-0イメージを聴取した。

## 結果

各項目の重要順位、クラスター分析及び単独+-0イメージ結果は、Fig.1のようになった。

<被検者Aの解釈：抜粋>

クラスター1：「話しやすい」～「頼れる感じ」までの8項目。明るいイメージ。暗くない、良いイメージ。自分が落ち着くような、居心地が良い…。こういう人がいたらいいなという理想。初対面であるカウンセラーに対して、頼りたい

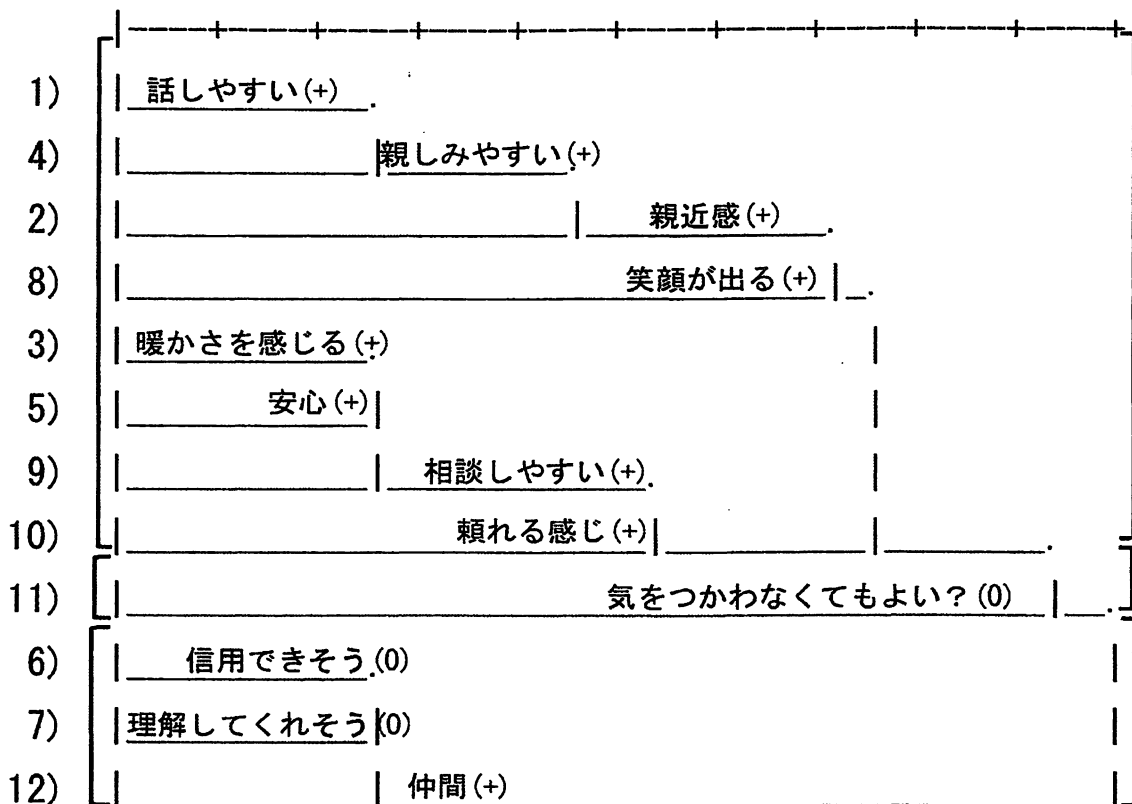


Fig.1. 被験者のデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目末尾( )内の符号は単独イメージ

とか、身を預けられそうという感じ。

クラスター 2: 「気をつかわなくてもよい?」の 1 項目。方言が同じだったから、変な親近感みたいな感じで、自分の思っている言いづらいことも、ポツと言えるのかな…というイメージ。方言を使ってくれたことによって、親しみやすさを感じて、素を話せそう…、という感じ。

クラスター 3: 「信用できそう」～「仲間」までの 3 項目。まだ親しくはなくて、これから歩み寄ろうとしていこうとしているような、歩み寄ろうとするような…これから自分の理解者になってくれるんじゃないかな…という、前向きなイメージ。「仲間」というのは、故郷が一緒って意味。同じ故郷で育ったから、同じものを食べたり、同じ言葉を使って育った人なんだろうな、分かってもらえそうだな、みたいなイメージ。このグループ

全体としては、頼りたい、自分を隠さないで話せる人を求めている、それに対しての、「いてほしい」という希望。

#### <被検者 A の総合的解釈>

クラスター 1 は、「話しやすい」「親しみやすい」人だから「親近感」を持ち、「素の自分」で「本音を語る」ことができる。カウンセラーの前で緊張していたときに、「緊張が解けてホッ」とした「笑顔が出る」。そして、「本音を語る」からこそ相手は受け入れてくれて、そういう人を「頼れる」。方言で話す相手に対して被験者の持つ、理想像のようなものが現れたクラスターと思われる。**<方言を用いることによる親近感や信頼感>**と命名できよう。

クラスター 2 は、「気をつかわなくてよい」というのは、「家族みたい」で「良いことでもあ



る」けれど、「相手に失礼という意味では悪いことでもある」。このカウンセラーに対して「何でも思っていることを話していいのかなあ、話せるかなあ」という心情。カウンセリングの場は日常とは異なるはずである。しかし、カウンセラーが方言で応じたために日常的な人間関係との境界が曖昧になり、自己を内省して客観的に答えるような場を作りにくくなってしまっているように思われる。これはいわば、**<相手と親密になりすぎることの功罪>**ということになる。

クラスター3は、「信用できそうとか理解してくれそう」というのは、「くれそうかな」という、まだ確信がないところで、探っているような状態。「仲間」というのは、「そうなのかな」という期待感のような感じ。「方言って、地域のかたまり」だから、「味覚とか…濃い味を好んだり、お祭りとかで七夕の話が理解できたり、伝わったり」する。**<地域の文化的背景を共有していることによる期待感>**と命名できよう。

### 考察

反応全体の+-0 イメージを見ると、クラスター1は8項目全てがプラス、クラスター2はゼロ、クラスター3はゼロが2項目とプラスが1項目となっている。マイナスの項目はひとつもなく、被験者は方言の使用に対しては概してプラスの印象を持っていることは明らかである。

しかし、これをもって、この被験者に対しては方言の使用が奏功する、とは必ずしも言えまい。

3つのクラスター相互の関係に着目すると、まずクラスター1は、被験者自身が方言を使用する相手に対して抱く印象であり、被験者内に留まるものである。それはいわば理想像なのであり、ゆえに全てがプラスというイメージになったと考えられる。それがクラスター2では、実際の相手(カウンセラー)との関係のあり方に対する迷い、やや大げさに言えば、困惑が生じているようである。

治療的関係を形成するはずのカウンセラーとカウンセラーだが、方言によってなまじ親近感を覚えたがために、内省する姿勢の欠如したざっくばらんな人間関係になってしまう危険性を孕んでいるように思われる。そしてクラスター3では、自分が生活している地域の背景を共有しているので、理解してくれるのではという期待が起きている。しかし、それは飽くまで未確定な「期待」なのである。だから、プラスとは判定しない。クラスター1の「理想」を希求する被験者の渴望があらわれていると考えられる。

### 結論

本研究は、カウンセラーの方言による応答が、方言使用者へのカウンセリングにおいて、その意識にどのような効果をもたらすかをPAC分析によって明らかにしようとしたものである。今回の調査の結果、方言による応答は、親近感や信頼感をもたらし、地域の生活体系や文化を共有しているという感覚を与えるものである一方で、治療的関係の形成においては日常的関係との差異を曖昧にしてしまう一面も明らかになった。

### 文献

近藤和也(印刷中)：カウンセラーの方言による応答がカウンセリングに及ぼす効果 福島学院大学大学院附属心理臨床相談センター紀要  
内藤哲雄(2002)：PAC分析実施法入門[改訂版]「個」を科学する新技法への招待. ナカニシヤ  
吉岡泰夫(2011)：コミュニケーションの社会言語学. 大修館書店

(Kazuya Kondo, Tetsuo Naito)

# 「ゆとり教育」の受け止め方の共通項目を用いた PAC 分析

～ 共通項目を用いた分析で学生と教師間での差違を抽出できるかを検討する ～

今野 博信

(学泉舎・室蘭工業大学非常勤講師)

key words: 3語程度

## はじめに

いわゆる「ゆとり教育」については、一時期マスメディアが取り上げる格好の話題となっていた。その取り上げられ方は、この教育を受けた世代が持つとされる特性を問題視し、不安を煽るような内容が多かった。そうした状況の中、その時期の教育を受けた当事者である生徒や学生が、「ゆとり教育」に対してどのようなイメージを持つのかについて調査した報告はあまり多くなかった。

さらに、この時期の教育を施した側である教師が、「ゆとり教育」に対してどのようなイメージを持つのかについて調べた報告も多くは見られなかった。二者間に違いがある可能性があるのにも関わらず、時代の関心は次に話題とされた学力向上にのみ向かっているようである。

「ゆとり教育」は過去の問題とできるものではなく、この教育を受けた世代は今後の人生で何かの不調に遭遇した際にこの被教育体験を原因の一つに数えあげられる可能性がある。現在や未来の問題であると考えなければならない。

こうしたことから、学生と教師の両者に、いわゆる「ゆとり教育」はどのようなイメージで捉えられているのかを調べておく必要がある。そしてそれは、教育の計画と実践の関係を振り返る契機にもなり得る。

## 目的

学生と教師とが、いわゆる「ゆとり教育」に対してどのようなイメージを抱くかを比較検討することを目的とした。その際には PAC 分析を用い、両者の対比を可能にするために共通する項目を設け、その効果についても検証した。

## 方法

M工業大学の学生 5 名(10代～20代)と公立小中学校教員(30代～50代) 6 名を対象として、「ゆ

とり教育」をテーマにした PAC 分析を 2013 年 2 月に実施した。提示刺激としては、下記の文章を示し読み上げた。

「あなたは、『ゆとり教育』という言葉を知ったことがあると思います。概ね 1987(昭 62)年～1995(平 7)年生まれで、現在、高校 2 年生から大学卒業後 3 年目ぐらいの人が受けた教育とされています。

あなたは、この『ゆとり教育』という言葉に、どのような印象をもちますか。浮かんだイメージについて、どのようなものでもいいので教えてください。

実際に『ゆとり教育』という言葉が使われた場面での印象、あるいは自分で使ったときの感じなど、心に浮かんだものを、そのままの順番で教えてください。聞いたままを記録していきます。」

想起項目の中に、事前アンケートから選び出した「学力低下」と「自主性」の 2 項目がなかった場合には、付加してその後の手続きを進めた。

PAC 分析のデータ収集には、PAC helper を用い、クラスター分析用の MS エクセルのアドインソフトを利用してデンドログラムを作成した。その結果の図を表計算ソフトでノートパソコンに表示させ、その画面を協力者と共に見ながらインタビューした。

## 結果

学生の「ゆとり教育」に対するイメージは、断定的ではなく逡巡を見せながらも最終的なまとまりとしてはプラスのイメージに結びつく例が多かった。しかし部分的には、社会一般から自分たちに向けられた「学力低下」などの批判的な評価に強く影響を受けていた。図 1 に示したのは、あいまいな反応が強く見られた例である。

一方、教師で見られたのは、その教師自身により「自主的」に、「ゆとり教育」に携わった場合には、より肯定的なイメージと結びつくという傾向であった。つまり、より自覚的だった教師は肯定的に受け止める傾向を示し、そうでない教師は否定的に受け止める傾向を示した。図 2

には、「ゆとり教育」を違和感を持って受け止めた教師の例を示した。

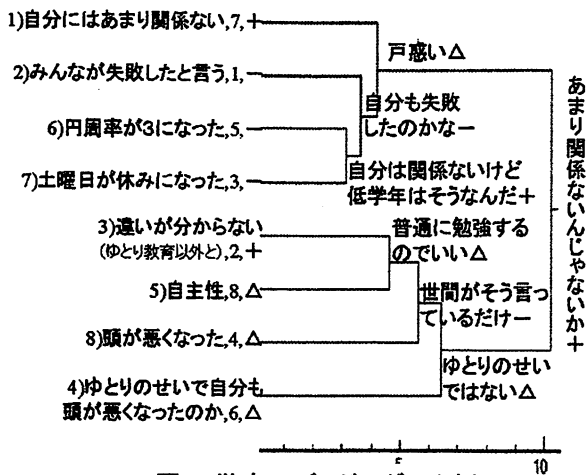


図1 学生のデンドログラム例

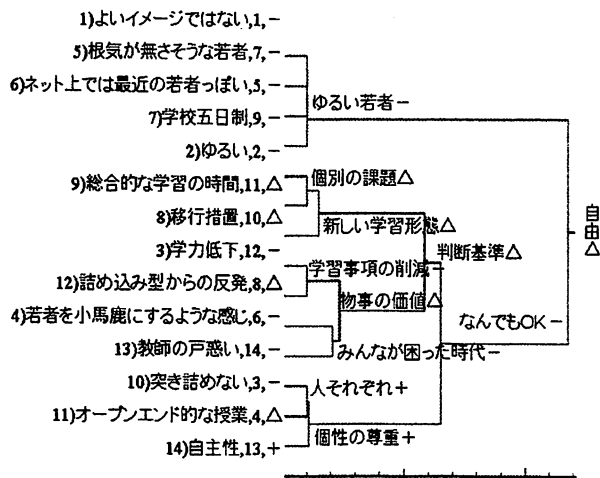


図2 教師のデンドログラム例

調査協力者の全員に共通項目として付加された2項目については、学生と教師の間に想起順から重要度順に並び替える際に異なる傾向が示された。学生は「学力低下」の並び替えで順位が下がる傾向が見られ、教師では上がる傾向が見られた。「自主性」の並び替えでは、学生で順位を上げる例が多く見られたのに対し、教師での上昇例は少なく上がり方も小さかった(図3)。

図3には、被験者間要因(学生と教師)×被験者内要因(学力低下と自主性)×被験者内要因(想起順と重要度順)の分散分析で3要因の交互作用が5%水準で有意( $F(1,7)=6.82, p<.05$ )となった結果も書き加えている。ただし、この分析に際しては、極端な回答を示した学生と教員のデータ、各1例を除外してある。

学生にとっては、「ゆとり教育」と関連するものとして「学力低下」よりも「自主性」がより重要なイメージとされたが、教師ではそのような関係は見られなかった。

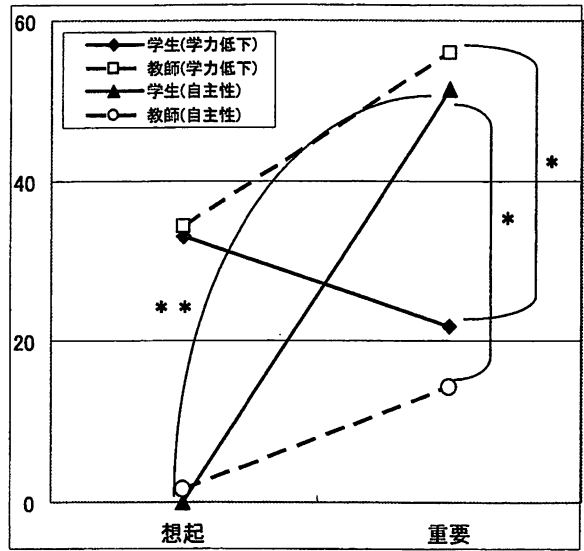


図3 共通項目の順位変化

### 総合考察

重要度順位について内藤(1997)は「重要度順位の高いものは、問題事象や臨床の内容にかかわるときには『主訴』に該当する。この指標によっていかなる内容を取りわけ重要と感じているかが明らかとなる」と述べ、その数値のもつ重要性を強調している。今回の分析では、共通項目の重要度順を指標にして、学生と教師の二つの群を比較検討した。

PAC分析を用いる本来の目的は、個の内面の豊穡さをデンドログラム上に示すことにあった。そこに共通項目を付加することで何が解明されるのか。松浦(2012)では、個人内の時間的な変化を検討するために項目が付加されたが、今回は個人間の比較のためであった。この適用では、限定的ではあるが群間の差異を導き出すことができたと考えられた。この項目付加の結果だけではなく、デンドログラムの詳細な読み取りなどからも結論は補強されるべきであり、このような共通項目の付加による分析例の集積でより安定的な解釈法が確立していくことが望まれる。

### 文献

内藤哲雄(1997) PAC分析実施法入門「個」を科学する新技法への招待, ナカニシヤ出版  
 松浦美晴(2012) 時間的展望の探索におけるPAC分析の有用性の検討 山陽論叢 山陽学園大学 19, 16-27.  
 今野博信(2014) 生徒と教師間における「ゆとり教育」の受け止め方の比較 室蘭工業大学紀要 63,99-109.

(Hironobu KONNO)

# 偏見や差別を持つ養護教諭に対する PAC 分析

—児童・生徒の嫌悪・回避行動の視点から—

○加藤 信子

(福島学院大学大学院 心理学研究科)

内藤 哲雄

(福島学院大学 福祉学部)

キーワード：養護教諭、偏見・差別、児童・生徒、嫌悪・回避行動

## 目的

近年、学校に適応できずにいる児童・生徒が増えてきている。その中には、教室へ入ることができずに、保健室へ登校するものも少なくない。例えば、田中（2013）は、保健室は、子どもたちにとって、誰でもいつでも利用できる場所で、「心の居場所」となることが求められている。「心の居場所」となる保健室を担当する養護教諭が、偏見を持ち、差別していると感じた時、子どもはどのようなイメージを持つのであろうか。イメージの内容を検討し、分析することにより、養護教諭に求められる役割を知る手掛りも得られることができるであろう。

本研究は、児童・生徒に対して偏見を持ち差別していると感じた時の、感情や反応を探索することを、PAC 分析により検討することを目的とした。

## 方法

**被検者：**養護教諭に、直接関係している小・中学生であると、現在の利害関係などから、内省することが難しいと考えたことから、回想法での回答を求め、20代前半の女子大学院学生に被検者の依頼をした。

**連想刺激と手続き：**『あなたは養護教諭が児童・生徒に対して、嫌悪感や偏見を持ち、差別していると感じた時、あなたはその養護教諭に対してどのように感じ、どのように関わっていきたいと感じますか。また、実際にどのように行動すると思いますか。頭に浮かんだイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい。』と口頭で教示し、文章も提示して、連想反応を得た。重要順に並べ換えさせた後、各項目間の直感的類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法で

クラスター分析し（分析ソフト：HALWIN）、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での＋・0のイメージを質問した。

## 結果

被検者は中学校時代の女性の養護教諭を想起して回答をした。

各項目の重要順位、クラスター分析及び単独＋・0のイメージの結果は、Fig.1のようになった。偏見や差別に関する連想刺激であったので、全体としてマイナスの感情状態であることは自明であるが、クラスター2の4項目のうち「そんなひどい先生であるはずがない」「偏見を持たれている生徒のことをよく知りたいと思う」「偏見される生徒が悪いのだとおもう」の3項目にプラスの感情状態が示されていることは注目すべき点である。なお、－は全体の73.3%で、0は「自分の思い違いかもしれないと思う」の1項目のみであった。

<被検者による解釈：一部抜粋>

【クラスター1】は、「自分も陰で悪口を言われたりしているのではないかと不安になる」～「養護教諭も人間のただなと思う」の4項目。私は中学校の頃、保健の先生と仲が良かった。どうやったら先生に好かれるのかこのまとまりのテーマのかなと思います。でも、偏見を持つような先生は嫌いなので、その時点で不信感みたいなものをもっているかもしれません。とにかく、先生に好かれようとして…。(Q：先生に好かれようとするとはどのような?) うーん、先生のご機嫌をとる…。

【クラスター2】は、「自分の思い違いかもしれないと思う」～「偏見される生徒が悪いのだと思う」の4項目：このグループは事実確認というか、

やっぱり、先生が大好きなので、先生の事を信じたいという気持ちが出ているんじゃないかなあと思います。(Q: 他にはどうですか?) それでもやっぱり、先生に対する不信感は持っているのだと思います。やっぱり詳しく事実を知りたい、うん、というグループかなと思います。

【クラスター3】は、「養護教諭を嫌いになる」～「養護教諭に対してよそよそしくなってしまう」の7項目: 先生を信じていたぶん、多分、失望したというか、自分が頼りにしていた存在だし、そういう人ではなくなったんだな、がっかりするとか寂しくなる、そんな感じです。多分、このようなことがあったら、もうこの先生の事は2度と好きにならないんじゃないかな。

【クラスター1と2の比較】どちらのグループも先生の事を信じたいと思っているのだと思う。でも、逆に不信感を持っているのだと思う。

【クラスター1と3の比較】このグループは正反対な気がします。1番目のグループは確かに先生の事が好きなんだけど、でも、不信感を持っていて、その部分では共通すかと思えます。

【クラスター2と3との比較】3番目のグループは先生は信じられないというか、先生が嫌いだって、先生が悪いと決めつけられていることがあるんですけど、2番目のグループでは、その事実を確かめたいということがあっていいのではないかと思います。

【補足質問】 **そんなひどい先生であるはずがないと思う**→どう考えても生徒側に何らかの問題があったから、せんせいが差別的だと捉えられるような行動をしたのかなと、個々では多分先生のことは1mmも疑っていないと思います。先生の味方をしたいという気持ちかと思えます。 **偏見を持たれる生徒のことをよく知りたいと思う**→先生をかばうために先生は悪くないという証拠を見つけ出したい。 **偏見をされる生徒が悪いのだと思う**→先生のせいじゃないというふうにしたい。だけど、やっぱり先生が悪いんじゃないかっていう、この時は思っていると。 **養護教諭全体のイメージが悪くなる**→この先生がこんなにひどかったんだから、先生なんてみんなそうなんだろう、信じていた分

大きな失望があったんじゃないかと思えます。

## 考 察

クラスター1は養護教諭が児童・生徒に対して嫌悪感や偏見を持ち、差別していると判断される状況の時には「自分も陰で悪口を言われたりしているのではないかと不安」になり、「養護教諭に嫌われないように振る舞う」ようになり、「養護教諭も人間なんだ」と感じる内容だろうと思われるく **養護教諭も人間なのだと思う**>というクラスターであるといえよう。

クラスター2は、養護教諭が生徒に対して差別的な態度をとったことは「自分の思い違いかもしれない」し、「そんなひどい先生であるはずがない」と思い、「偏見を持たれている生徒」について詳しく知ることや養護教諭が実際にその生徒に偏見を持った事に対するく **養護教諭を信じながらも不信感が残り、事実を確認しようとする思い**>を表しているクラスターといえよう。

クラスター3は、生徒に対して差別や偏見を持つ養護教諭を「いやだ」「嫌い」と感じるようになり、養護教諭を「避ける」ため、「保健室にはいかなく」なり「よそよそしくなってしまう」といったく **差別や偏見を持っていた養護教諭に対して失望と回避**>のクラスターと命名できよう。

本研究の被検者は、中学校時代の養護教諭との交流を想起して回答をおこなっていた。自分がたとえ信頼していた養護教諭であっても、嫌悪感や偏見を持ち、差別していると感じた時、その養護教諭を嫌だと感じる。一方では思い違いではないかと事実を確認しようと考えようとするが、もう以前のように信用することができなくなり、補足質問で引用したように、その養護教諭のみならず、保健室、さらに、他の養護教諭にも嫌悪感を抱いてしまうという結果が得られた。

養護教諭は、教科指導の教諭とは異なり、単位取得をするという必須条件によって、関係が作り出されるということがあまりないと考えられる。保健室に来室するという、子どもの自発的な行為によって関係が作られることが多いと思われる

る。しかも、養護教諭は、たいていの学校では1名であり、差別や偏見を持っているという事実があるとすれば、入室する、しないに係わらず、大きな問題になりうるのではないだろうか。

田中（2013）は、「養護教諭は、子どもたちが自分の思いや考えを素直に表現できる存在となるように努めなければならない」と述べている。子どもたちは病気やけがの手当てだけでなく、養護教諭との交流を求めて保健室を訪れる場合もあるだろう。本研究の被検者のように、信頼していた養護教諭に偏見や差別を感じながらも、信じようとする気持ちがあると考えるならば、子どもたちに対して、公平に接することが必要あると言えよう。加えて、日頃から、信頼関係を構築していくことが重要であるともいえるのではないだろうか。

今回の被検者は中学校時代を回想して回答していたので、現代との時代背景の違いや現在の被検者自身の考えが含まれている可能性は否定できないが、中学生の視点を反映していると考えること

は可能ではないか。たまたまではあるが、被検者と被検者と信頼関係のあった養護教師をイメージしてPAC分析を行った結果、信頼される教諭とはどのような観点であるのか、見つけたことを特筆しておく。

<引用文献>

田中さえ子（2013）子どもたちにとっての養護教諭—子どもの心をつつめる 児童心理 10. No.974

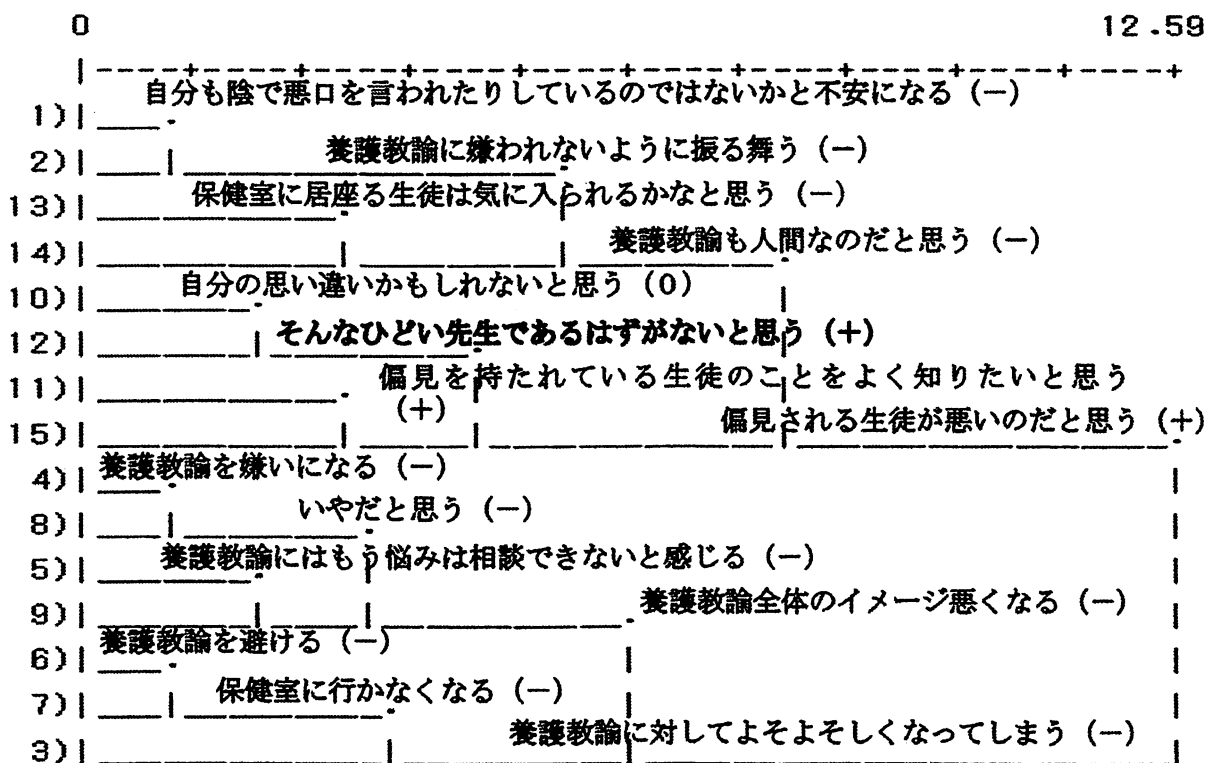


Fig.1 被検者のデンドログラム

1)左の数値は重要順位

2)各項目の後ろは ( ) 内は符号の単独イメージ

# コンパニオンアニマルへのフラストレーションと攻撃行動

—飼い猫を対象にしての PAC 分析—

○内海裕里花(内海メンタルクリニック) 内藤哲雄(福島学院大学) 七海隆之(福島学院大学)

key words: コンパニオンアニマル フラストレーション SST

## 目的

対人関係でのフラストレーション耐性が低く、問題を抱える人々の中には、最初から対人関係を通じてソーシャルスキル・トレーニング(以下、SST)を実施することが困難なケースが少ない。その際、まず動物との関係性を利用した SST の方法を用いることがある。但し、動物介在療法では、好感を持たれやすい動物種を用いていることもあり、クライアントと動物との間にフラストレーションが生じやすい状況にある。しかしながら、クライアントが動物に対してフラストレーションを感じやすい場面を治療者側が設定・操作できるならば、その動物への反応をチェックすることで、クライアントの対他関係(人間関係)における不調和・不適切な対応の仕方についての診断的評価が可能となり、動物との、そしてその後の人間関係での SST へと生かすことができると考えられる。このような観点から、本研究では、可愛がっているコンパニオンアニマルに対して、どのようなときに苛立ちやフラストレーションを感じ、攻撃してしまうのか、攻撃の前後にどのような感情が生じるのかのイメージ構造を探索することを目的とした。

## 方法

**被検者:** 40 代前半の既婚男性 A。対象となったコンパニオンアニマルは、夫婦で子どものように可愛がっている飼い猫。

**提示刺激:** 提示した連想刺激は、『あなたは、飼っている犬や猫に対して、どのような場面や状況で、いじめたり、やつあたりしたり、無視したくなりやすいでしょうか。そうした行動をとるとき、どんな感情が湧いてくるでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号を付けて、カードに記入してください。』。

**手続き:** まず、調査をいつでも中止できること及び研究発表に際してはプライバシーを配慮して発表することを伝え、了承を得た。

ついで、上記の提示文を印刷した用紙を呈示するとともに、口頭で読み上げて教示した。次に

連想反応のカードを重要順に並べ換えさせた後、各項目間の直感的類似度を 7 段階で評定させた。ついでワード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージを聴取した後、項目単独での連想イメージと +-0 イメージの回答を得た。

## 結果

被検者 A のクラスター分析及び +-0 イメージの結果は Fig.1 のようになった。

<被検者による解釈: 一部抜粋>

【クラスター1】「時間にゆとりがなく、かまってあげられないとき」～「後ろめたい感情」の 5 項目。「時間にゆとりがなく、かまってあげられないとき」、結構一番ホントになんか大きいような気がします。このまともよりは自分の気持ちだけ、みたいな感じですね。苦しい、後ろめたいっていうもやもやした感情が強いです。それで怒ってしまう自分がいると…苦しいですね。

【クラスター2】「二度とやらないと悔やむ」～「なさけない(自分が)」の 4 項目。色々してしまった後に、自分で感じるもの。それが並んで、濃いところが出てくるような感じがします。僕の場合は、無視するっていうのが普通の反応ですね。本当に苦しいですからね。手を出したり、例えば、やつあたりすると。一線を越えてしまった場合の自分の感情。例えば、猫を殴ってしまったとか、蹴ってしまったとか、それもちよっと強く。あとはもっと酷くいえば、人としてやったら、自分自身の中でも『嫌だなあ』ってことをしてしまったってときに、起こってくる感情。やる必要はないはずなのに、やってしまったような、あまり味わいたくない感情ですね。

【クラスター3】「自分中心(猫が)のような、わがままな振る舞いをしたとき」～「こちらを振り向いてくれないとき」の 5 項目。これは、「こちら側の要求が相手に通じないということ」が、イメージでは湧いてきます。ただ、「かわいすぎていじめたくなる」っていうのは、その中でもちよっと特別な感じがしますね。愛情からくる、あまりにも可愛いから構いたくなるような。構うのもちよっと度を超せば、いじめみたいになるので、これが特別この中でも違うっていうイメージ。

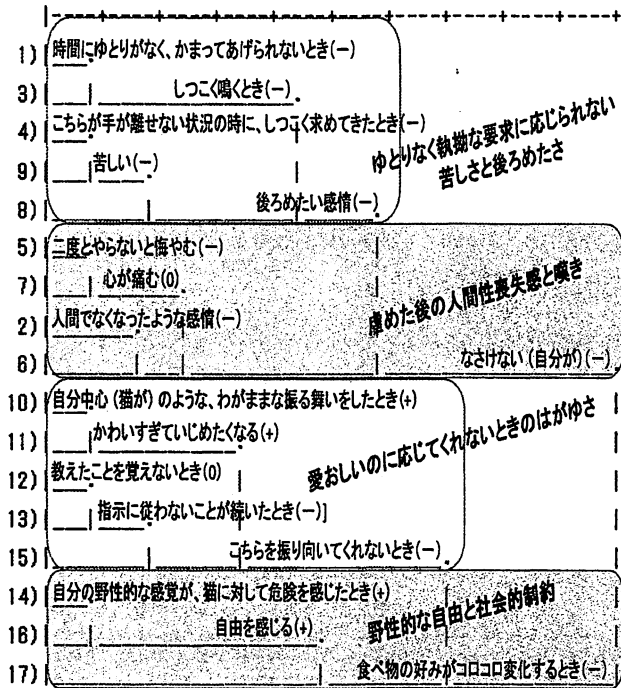


Fig.1 被検者 A のデンドログラム

1) 左の数値は重要順位

2) 各項後ろの ( ) 内の符号は単独でのイメージ

特に、ここはよくあることだし、あんまりネガティブなイメージはないですね。上の 2 つのかたまりよりも、なんとなく柔らかい感じがしますね。「つかみ所がない」ような柔らかかさ。非常に一方的なイメージ。僕の個人的な「欲求」、相手に甘えたいというか近づきたいというか、そういうまとまりのような気がします。

【クラスター4】「自分の野性的な感覚が、猫に対して危険を感じたとき」～「食べ物の好みコロコロ変化するとき」の 3 項目。ここは「野性的」というイメージですね。もう「人間」じゃなくて、ただ生き物として猫と接するような。理屈ではやりとりできない、通用しないようなことが、ここからイメージされます。倫理観とかあんまり社会的制約みたいなのがないという状況だったら、ちょっと開放的なイメージ。屋内とか、家の中とかかかっていう空間的な制約もあまりない。エネルギッシュな感じがするかも。力強い。「より自分の心の深いところで感じてるような?!」まとまりですかね。今生きる人間が忘れた感覚、感情っていうのはもしかしてあるのかなあなんて。

【クラスター1と2の比較】同じ所は、苦しいとか、心が痛むような、重苦しい、もやもやした感情があること。違うところは、1 つめのまとまりが

行動を起こす前、そして行動を起こしてしまったあとに、2 番目のかたまりが来るって所。どちらも何か、ネガティブな感じですね。あまり望ましくない感情。自分にとって。多分、誰か、周りの環境に対しても良くないような感情。違っているところは、自己完結させられるみたいなのが、この 2 つ目のグループで、1 つ目のグループっていうのは相手あって、環境あってのものが、今しました。強いです。すごく。

【クラスター1と3の比較】どちらも、猫に対して、いじめたくなるとか思うきっかけになるようなところは、ちょっと似てるかも。1 個目のまとまりは猫側からの動きがあっついじめたくなるときで、3 番目の方は、自分からきっかけを作った上で、それに対する猫の反応次第で変わっていくところが、違うところです。

【クラスター1と4の比較】同じきっかけなんですけども、感じる場所がだいぶ遠いような、自分の心の中で感じてる場所が非常に違っているようなところが違いですね。感じ方だけじゃなくて、その感じる度合いとか、同じカテゴリーには入るけど、ちょっと質が違うって感じですね。きっかけが相手側にあることが同じように感じるかも知れない。それに対してこっちが気付くっていうのもあるのかも。

【クラスター2と3の比較】やっぱこの 2 番目は行動を起こした後の感情だから、3 番目とは時間的に違う。なんかすごく遠い感じがします。「こちらを振り向いてくれない」「なさけない」という(笑)…各(クラスターの)まとまりの最後の文字(=文章)同士が…「きっかけと行動後の感情の違い」かな。…どちらも自分に、猫がいるときに感じる感情って言うところが似てます。一方的だなんて気がしますね…「僕から猫に」という方向で…

【クラスター2と4の比較】違っているところは、4 番目の方がポジティブな感覚で、2 番目はネガティブな感じっていうのが違う。感覚的に、気持ちが良いなあって思うような、深呼吸するようなのがポジティブで、それを感じたまましていると、気分が悪くなる、だるくなるというのが、ネガティブ。同じ所は、こう心にぐっと迫ってくるものがありますね。イメージすると、自分の体に、例えば電気が走ってくるみたいに、反応がある。この文字見るだけで気持ちが揺れる。揺れてる感覚が自分で分かるのは同じですね。4 つ目はその中でも幅がばーっと広がって



…言語化するの難しい。どっちも同じく感じるけど、4 つ目の方が、よりつかみにくいぐらい広いっていったらいいのかな？…違っているところは、2 番目は僕だけの心の中で感じてるところがあって、4 番目の方は、僕だけっていうよりも、こう個人というものの自体が無くなっているような感じがありますね。

【**クラスター3 と 4 の比較**】普段生活している中で、猫と一緒に、不自由があったときなんかに近いような感じがしないでもない。この先猫と長く付き合っていくとしたら、この 3 番目なんていうのはあまり感じなくなるかもしれないですね。4 番目は、なくなる。危険っていうのは、もしかしたら、あっちも興奮したらやる可能性があるから、あんまり無くならない。「可愛すぎていじめたくなる」っていうのは、無くならないかも知れないですね。あんまり可愛いから、まあ、食べたくなる。そういう嗜みつきたくなるっていう感情…多分、自分(の)中に取り込みたい、そういう感情があるのかな、もしかして。…違ったところは、4 番目は無限の広がりってこともないけど、結構広い人間の広がりみたいなのを感じる。で、3 番目はもっとせまい話。3 番目の僕から見た猫が非常に野性的であるってことと、4 番目の自分自身が、非常に野性的に変わってるといような所で似てる。

【**全体のイメージ**】全体的に見ると、『猫と上手くやっていない、それが自分にとってストレスになっている』っていうイメージ。1 と 2 かたまりと、3 と 4 のかたまりで…なんか違うように今、感じましたね。上の方は心がけ次第で変えられるけど、下の方は、なんかしょうがないなあって。一番下の「食べ物の好みがコロコロ変化するとき」は、ここにあるのは、すごく全体的に見ると不思議な気がします。ただ自分にとって思うようにいかないことっていうイメージ。かといってなんか、猫がなんかしたからっていう、受動的なものばっかじゃなくて、自分から求める能動的なところもあるから、自分の思った通りにはいかない、本当にもう、どうしようもないこと。例えば猫が言葉も話したりして、お互いに意思疎通がもっと人間っぽい方向に傾いたら…こんなことでは全く、いじめたくなったり、やつあたりしたりっていうときは、変わる。全体的なイメージは、やっぱり一方的。

#### <被検者についての総合的解釈>

クラスター1 は、「時間にゆとりがなくかまっ

てあげられないとき」に猫かきしこく鳴くとき、「こちらが手を離せない状況の時に、しつこく求めてきたとき」、人間である自分が「苦しい」「後ろめたい」といった感情になる。<ゆとりなく執拗な要求に応じられない苦しさと後ろめたさ>と命名できよう。

クラスター2 は、猫をいじめたり、やつあたりしたり、無視したりした後に「二度とやらないと悔む」し「心が痛む」自分の状態があらわれており、そのようなときに「人間で無くなったような感情」や「なさけない」という思いを抱く。<虐めへの後悔と心痛、人間性喪失への嘆き>とまとめられよう。

クラスター3 は、猫が「自分中心のようなわがままな振る舞いをしたとき」などに「可愛すぎていじめたくなる」一方で、危険な行動に対して「教えたことを覚えず」、「指示に従わないことが続いたとき」に「イライラ」する。この二つの感情がどちらも、人間である自分側の一方的な要求(needs)に「振り向いてくれない」という連想項目に結節される。<愛おしいのに応じてくれないときはがゆさ>であるといえよう。

クラスター4 は、猫の野性だけでなく「自分の野性的な感覚」にも気づき、社会的制約のない「自由を感じ」ながら、猫と向き合おうとしているにもかかわらず、「食べ物の好みがコロコロ変化する」猫への妻の憤りに直面し、葛藤状況が生起する。これは<野性的な自由と社会的制約>と解釈できよう。

#### 総合考察

Fig.1 を見ると、マイナスが 11、プラスが 4、ゼロが 2 とマイナスの項目が圧倒的に多い。これは、いじめたり、やつあたりしたり、無視したくなる状況と、そのときの感情について連想させたことによるのであろう。そこで逆にプラスの項目が注目される。「自分中心(猫が)のようなわがままな振る舞いをしたとき」「かわいすぎていじめたくなる」「自分の野性的な感覚が、猫に対して危険を感じたとき」「自由を感じる」の 4 項目は、社会的制約のない野性的な動物的な感覚を意識することによるものである。

クラスター1 は人間側に余裕のない状況で、猫が執拗に甘えてきた時のことがまとまっている。こういった状況の時には、かまってあげたいのにそうしてあげられない、怒りたくないのに怒ってしまうといった、意思に反する行動が出て

しまうことによって、フラストレーションが生じ、「苦しい」「後ろめたい」とのもやもやした感情がわき上がってくることを示している。

つぎのクラスター2では、殴る・蹴るといった身体的な暴力が吐露される。そのような暴力行動の後には後悔のみならず、「人間でなくなったような感情」にさえ陥る。「なさけない」という感情の根源となる「その状況で不利な方に対して、敢えて力行使した」という表現は、森田(1994)のいじめの定義と符合する。いじめの要因の1つに「異質排除」があり、実際に被検者は「僕とは違った存在」という言い回しを繰り返している。「猫という存在」は人間にとっては異質なものであり排除の対象になりやすいだろう。また河合(2009)は、この異質排除における「無視」という行為を、日本特有の文化現象としており、社会的に固定・閉鎖された状況で起こりやすいことを指摘している。

クラスター3では、本人解釈での「可愛い」「愛しい」という発言に注目したい。このような感情が、猫が自分とは違う「異質」な存在であることを感じながらも生じている。しかも、「食べたい」「取り込みたい」という同化の欲求すら感じている。また連想項目の「かわいすぎていじめたくなる」が、「こちらを振り向いてくれない」と結節しており、こうした欲求が充足されない時、いじめに転換してしまうのであろう。

また「教えたことを覚ええないとき」「指示に従わないことが続いたとき」の2項目は、苛立ちながらも猫を危険から回避させようと四苦八苦している様子である。コンパニオンである猫を喪失することへの不安や、安全なところに囲っておきたい、束縛したいという感情が潜んでいると考えられる。ここでも「こちらを振り向いてくれない」に結節することから、人間側の思いが空回りしていることを窺わせる。さらに被検者は、この2つを「無くならない」と述べ、「他の人にもあるのでは」と感じている。そこで、被検者の過度な愛着と束縛は、「共依存」ではないかとの直観をもたらす。そこで、親密性ではなくて共依存に存在する特徴(斎藤, 1999)の5項目に本研究の事例を照らし合わせると、自己中心性(何度も強調される「一方的」という言葉)、不誠実(猫に対するアンビバレントな行動)、支配の幻想(人間の基準に猫を合わせようとする心理)、自己責任の放棄ないし他者からの非難の恐れ(「本当はしたくないけれど」という前置き)、自

尊心の欠如(「こちらを振り向いてくれない」の補足質問での回答)というように、5項目の全てに当てはまる語りがあふ。しかし「時の経過と伴になくなる感情」とも述べていることから、このケースのコンパニオンアニマルとの関係を一概に「共依存」とは断定できない。

ところで、「相手が猫でなく言葉を話せたら無くなる情動」との被検者の語りからは、非言語コミュニケーションによって関わる動物に対しての方が、対人間よりも自己を投影しやすく、共依存的関係を形成しやすいことを示唆している。動物と共依存関係に陥っている自分への気づきを与えることで、相互自律的な親密性を意識的に築いていく。そして、そうした関係性を人間関係へ般化させるSSTを考えることができよう。

クラスター4の「自分自身の野性的な感覚が、猫に対して危険を感じたとき」、社会的拘束のない「自由を感じる」は、たとえ危険な関係であっても、理性を超えた野性的な交流をコンパニオンアニマルと形成できることを示唆する。クラスター3で言及した共依存を招きかねないほどの非理性的交流を、言葉を話せない動物は体感的に可能とさせる。この実感の伴った動物との関係を通じて、言語以前の人間関係を再学習する基礎作りとすることもできよう。

ところで、「食べ物の好みコロコロ変化するとき」の補足質問への回答からは、猫と本人の直接的な関係だけでなく、第三者との問題(猫の食事の世話をする妻の苛立ちへの対応)が、猫への「やつあたり」をもたらしていた。社会的拘束から自由を得たと感じたときに、別の社会的制約によって苛立ちを感じていることが読み取れる。また動物との制約のない自由な交流の在り方は、子どもが動物に関わるときの様子に似ている。Freudは未開人と動物の関係に類似していることも指摘している。これは被検者本人解釈にもあった「今を生きる人間にはあまり感じられないもの」という表現と対応する。つまり、人間が動物と関わる時には子どもの頃に感じていたような自由や、現代人には現れにくい本能的な部分が開放され、それが喜びや快感として感じられてくる。しかし、それでも新たな社会的制約によって現実に戻されるときには、フラストレーションが生じると換言できよう。

(Yurika Utsumi, Tetsuo Naito & Takayuki Nanaumi)

# 前任セラピストからみたケース引き継ぎのスキーマについて

—15年の臨床歴をもつ心理臨床家の事例から—

○佐藤 佑貴(福島学院大学) 内藤哲雄(福島学院大学)

key words: 引き継ぎ 治療プロセス PAC分析

## 目的

心理療法は、河合(2002)が指摘するように「生きている人間にかかわること」であり、セラピスト(以下 Th)とクライアント(以下 Cl)の二者関係は、治療の展開に重要な影響を与える心理療法にとって核となる要因である。その関係に揺らぎを生じさせる要因の一つとして、ケースの引き継ぎがある。引き継ぎは、Thが何らかの理由で心理療法を担当することが不可能な状況となり、かつClにとっては、心理療法の継続が望ましいと判断される際に生じる。ケースの引き継ぎは、「それまで自分を支えてくれた馴染みの面接者との決別と、未知の面接者との出会い(鈴木:1983)」を意味する。このことは回復過程にあるクライアントにとって重大なエピソードであり十分な配慮が必要である。一方で、引き継ぎという事象はTh側にも大きな影響を与えるイベントである。

この点に注目し、筆者らはケースの引き継ぎにおけるThのスキーマについてPAC分析を用いて検討した。はじめに後任者の立場にあるThを対象とした調査(佐藤・加藤・内藤:2012,佐藤・内藤:2013)を実施した。この研究では、臨床実践初学者の調査協力者において、「前任者との違いを気付かされ、探りながら関係づくりを続けていく」プロセスが表れ、Clと関係を築く入口で前任者の存在が大きく立ちはだかっている構造があると推測された。また、臨床経験5年の臨床家では「Thが前任者と違う自分を打ち出していくことで、何度も危機に陥りながら、2人で思い出を語れるような、実際の関わりの中での攻防」がプロセスとして表れていた。

次に、前任Thとしての引き継ぎのスキーマについて検討した。佐藤・内藤(2014)では、駆け出しのTh(本研究における調査協力者B)を対象にPAC分析を行った。そこでは、“別れ”という情緒面での影響の大きさと、治療プロセスや今後の課題等の連想がないことが特徴であった。

本研究では、中堅程度の臨床歴のある心理臨床家を対象とし、前任Thとしての引き継ぎについてPAC分析を実施し、イメージ構造を探索することを目的とする。先の心理臨床実践の

初学者を対象としたPAC分析の結果と対比させることで、心理臨床家養成課程にあたっての教育的示唆を得ることを試みたい。

## 方法

### 調査協力者

協力者A:C県D市の心療内科クリニックに勤務する30代後半女性臨床心理士(職歴15年8ヶ月)。現クリニック就職時、および産休時に前任Thとしての引き継ぎを経験している。

協力者B:C県D市にある臨床心理士養成大学院を修了し、C県E市精神科病院に勤務(職歴4ヶ月)している20代前半の女性。Bは大学院修了時に前任Thとしての引き継ぎを経験している。

手続き:『あなたが担当している子どものケースが、後任者に引き継がれることになったとき、あなたはどんなことを感じますか。ケースがどのように引き継がれていくようにしようしますか。後任者にはどんなことを伝えようしますか。また、担当者が他の人にかかわることを子どもに伝えたときに、子どものあなたへの関わりはどんな風に変化すると感じますか。それに対してあなたはどんな風に感じたり、関わろうとしますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。』と指示し、文章も提示した。次に連想項目を重要順に並べ替えさせた後、各項目の直感的類似度を7段階で評定させた。ついで、ワード法でクラスター分析し、各クラスター(以下CL)のイメージや併合理由、単独の+イメージを聴取した。

## 結果

協力者のクラスター分析及び+-0イメージの結果は、Fig.1, Fig.2のようになった。

### 事例1.(協力者A)

デンドログラムはFig.1参照

<協力者Aによる解釈:一部抜粋>

<協力者Aの解釈:抜粋>CL1は、「後任者のやり方を尊重する」～「引き継ぎはシステムティックにたんとと行われるようにする」の5

項目：クライアントを見捨てているみたい。そういう意図はないんだけど、これだけ見るとクライアントからみたら冷たいカウンセラーだ。機械的。型どおり。…だけどそれが一番クライアントのためになる。冷たいようだがライオンが子どもを崖から突き落とすイメージ。冷たいようだけどそれがその子のためになる、というイメージ。

CL2は、「自分の持つ情報をおしみなく伝える」～「よろしくたのむ」の3項目：引き継いでもらうけど、丸投げにはしませんからね。それっていうのはどこかで丸投げしてごめんねという意識がある。引き継ぎっていう大変な作業をやらせちゃってごめんねっていう罪悪感の罪滅ぼしのような…。だけど、心理士としてのお仕事としてはそういうもんだからよろしくね。心理士である限り、前任者が辞めれば後任者が引き継ぐのは当たり前でも申し訳ない、とも思う。アンビバレントな思いが混在する。CL1もCL2も。(CL1は)クライアントに対する悪いなという気持ちと、けどそういうもんだよという。世の摂理としては別れはつきもの。カウンセリングで起こりうる、そういうことを経験すれば日常でも役に立つ。……そういう風に思えば思うほどそれも罪悪感の合理化のようにも思う。その繰り返し。

CL1とCL2の比較：CL1はCIに対する考え、CIに対すること。CL2は引き継ぎ者に対すること。CL1はCIのためになることであり、CL2は後任者のためになること。それぞれ最善のことであり、これ以上できることはないと思っている。今の自分にできる最善最良。

全体を通して：なかなかシステムティック。これが自分の引き継ぎという感じがする。わりと感情的にならず淡々と。かつ丸投げせずに、アフターフォローもします、みたいな。実際、何だろう…引き継ぐからクライアントに申し訳ないとは思ってないって言ったらアレだけど、やっぱり、申し訳ないけどそれが悪いこととは思わない。いい機会だと思っている。それは生きていく上で必ず起こりうることだから。その中でできる限り最大限のことをするのがよい。これが自分の中で最善なんだと思う。後任者を信じてお任せするしかない。あと、クライアントの力を信じるというか。今までカウンセリングで自分とやってきたことが生きれば誰とでもやっていけるだろうという感じ。そういう気持ちがあるから、お任せという感じがあると思う。

補足質問：「1）よろしくたのむ」→後任者に。がんばれよっていう意味もあるし、お願いしますと

いうこと。「5）あなたの力となる」→どんな人ともうまくやるということが世を生きていく術となるから。日常生活に戻った時にやっていくことの練習になる。違うカウンセラーとやるということ。「8）たんたんと」→あまりお涙ちょうだいのような感情的な引き継ぎではなく、やるべきことをやる。CIに次のカウンセラーを紹介したり、これまでのカウンセリングでやってきたことを話したり、次のカウンセラーとどうするかは次のカウンセラーと決めて、ということをやっていくのが大事。別れの感情やCIの感情に振り回されることなく、やるべきことをやっておくことが大事。十一のイメージについて：8)の(0)について→ニュートラル。気持ちとしてはクライアントのために、後任者のためにとやっているけど、それだけでなくやるべきことをやるということ。(+)は何々のために、というイメージ。

#### <協力者Aの総合的解釈>

CL1：“別れ”に関して後任ThやCIへの様々な思いを孕みつつも、「後任者のやり方を尊重」し「どんなカウンセラーともやっていくことがあなたの力となる」とCIと後任者を信じ、Thとして「引きつぎはシステムティックにたんたんと行われるようにする」ところから、<別れを成長につなげるための専門家としての意志>のクラスターと言えよう。CL2：CIの成長のために「自分の持つ情報をおしみなく伝え」、「何かあればいつでもお助けするので連絡して」と間接的協力は惜しまない態度を示しながら最終的には「よろしくたのむ」と後任Thへ託している。<後任者への信託>と命名できよう。

#### 事例2. (協力者B)

デンドログラムはFig.2参照

※協力者Bについては日本応用心理学会第81回大会(2014)にて発表した。本稿では、以下のBに関するデータおよび解釈について同大会発表論文集(佐藤,内藤:2014)より抜粋する。

<協力者Bの解釈：抜粋>CL1は、「クライアントの良さ」～「自分がしていたアセスメントと方針を伝える。」の10項目：今後への期待が大きいのかなと思いますけど…。Thも含めてお互い今後うまくやっていってほしいな。なので、今自分が伝えられることを伝えようと。やっぱり、いい流れで終結に持って行ってほしいなとも思います。だから中断しないように、とか、終結に向けていい流れになることを期待する。

CL2は、「いつもと変わらない流れで進めた。」～「今までの経過と行っていた課題内容。」の4項目：もう終わりだねという雰囲気を出しながらだと CI も不安になるかなと思ったので、いつもと変わらない対応をしようと強く心がけていましたね。受け皿がブレないような準備、心構えで対応をとっていたというのがあります。CL3は、「不安を受け止めるようにした。」～「別れと一緒に味わう。」の12項目：このCLはCIもThもどっちの気持ちも入っているんじゃないかなと思いましたね。やっぱり別れに対して反応している、申し訳なさというか、CIの意向でというわけではないので、申し訳なさはありましたね。さみしさと申し訳なさというアンビバレンツな気持ち。CIと私して“さみしいね”という言葉も出せし、“今日で終わりだね一年間どうだった？”という振り返りもあやふやではなく、本当にどちらかの自己満足で終わらない作業。だから、スッキリ終わった感じでした。全体を通して：今後のCIの成長を期待する感じになるのかな…私の印象だと。CL1に達成する段取りに、下からCL3、CL2とくる。お別れを伝えたのがスタート。そしたらCIがこういう行動を示した。そしてThがこう考えるというのが下であって、それに対していつもと変わらないThがあって、CIの今後について後任に伝えるという一連の流れになっている。

#### <協力者Bの総合的解釈>

CL1：「終結に向かってのよい流れをきたいする」「今後へのきたい」が実現に近づくように「自分がしていたアセスメントと方針を伝える」というところから<後任者との“良い”関係への期待とそのための伝達>と解釈できる。CL2：「今までの経過と行っていた課題内容。」等を伝達することや、セッションでは「いつもと変わらない流れで進めた。」というThとして必要と考えている態度の実践のイメージであるところから、<終結へ向けた前任者としての整理>と命名した。CL3：「さみしさ」や「今まで以上に頑張ろうとする。」といったThおよびCIの別れに伴う情緒や行動が表れているところから、<“別れ”に伴う情緒不安定>のクラスターと言えよう。

#### 考 察

Fig.1からは、連想項目の＋イメージは、プラス項目7、0項目1、－項目0であった。プラス項目がほとんどである。Thとしての責務を果た

さんという意志と、後任Thとし、信じ、託す・委ねるという態度が表れていると考えられる。

A,B両者とも引き継ぎにあたり「申し訳なさ」を感じ、CIの今後の成長を期待している点は共通している。しかし、Bにおいては情緒的揺れ動きへの項目とCIの今後への期待がイメージの中心をなしており、それを支える専門的視点のイメージが非常に少なく、重要度も低くなっていることが特徴で、Aとの大きな違いであると言えよう。

また、引き継ぎという“別れ”についての捉えもAとBでは異なっていると言える。Aは「別れがCIをさらに成長させる」と糧として捉えているのに比べ、Bのデンドログラムでは“別れ”の体験を踏まえた見通しが出てきていない。このような治療プロセスを意識した態度は、Thとしての専門性を支えるものであろう。これは臨床心理士の育成にあたって初学者に教授すべき重要な視点であると考えられる。

本研究によって、Thは担当するCIの支援において、どこまで担うことができたのか、これからの課題はどんな点にあるのか、最終的なゴールをどう考えているのかなど中長期的視点の中の自分との関わりについて明確なビジョンを持てる人材を育成することが質の高い臨床心理士養成には欠かせない点であることが示唆された。

河合隼雄 2002 心理療法入門, 岩波書店.

佐藤佑貴, 加藤美奈子, 内藤哲雄 2012 ケース引き継ぎのスキーマに関するPAC分析-対象児と後任セラピストの関係性の変化-, 日本洋洋心理学会第79回大会発表論文集, p24.

佐藤佑貴・内藤哲雄 2013 ケース引き継ぎのスキーマに関するPAC分析(2)-心理臨床実践初学者である後任セラピストの対象児への関係性志向について-, 日本応用心理学会第80回記念大会発表論文集, p152.

佐藤佑貴・内藤哲雄 2014 ケース引き継ぎのスキーマに関するPAC分析(3)-前任者からみたクライアントとの関係性の変化と引き継ぎのための整理-, 日本応用心理学会第81回大会発表論文集, p36.

鈴木健一 1983 大学の心理教育相談室における心理臨床, 鎌幹八郎・名島潤慈編著, 心理臨床家の手引き〔第3版〕p189-194.

(Yuki Sato, Tetsuo Naito)

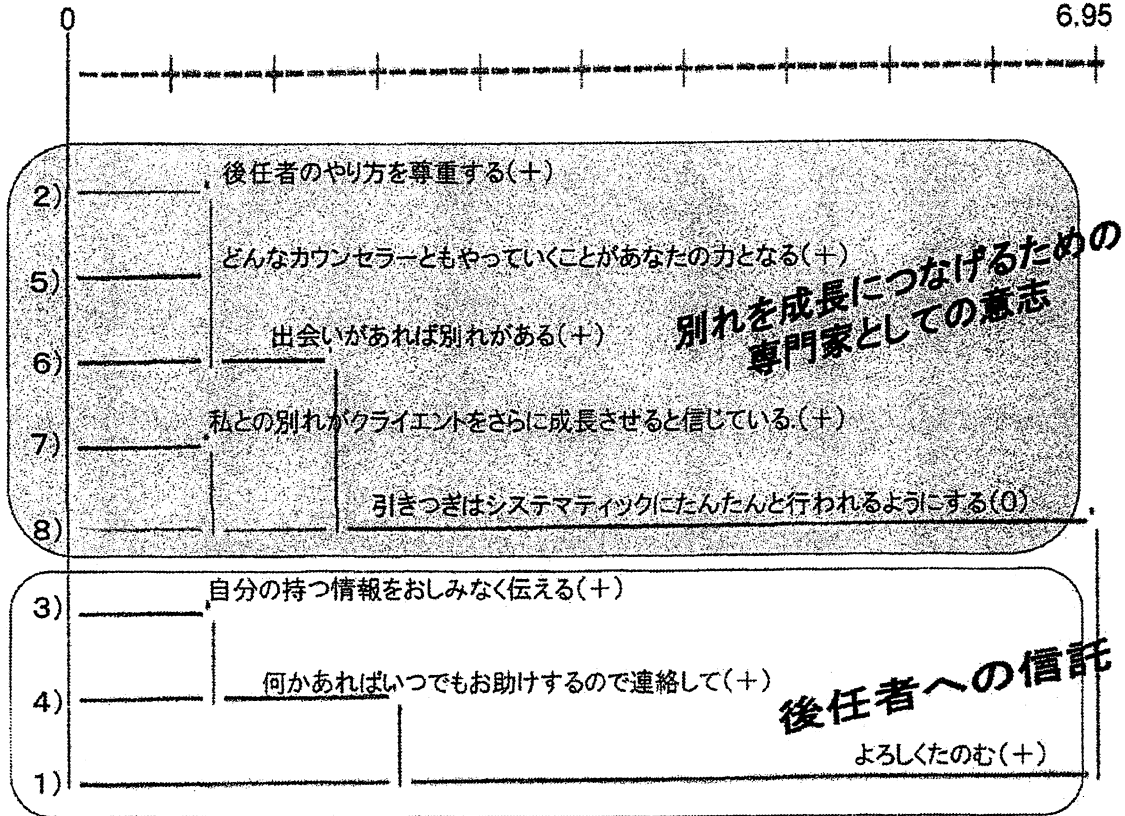


Fig.1. 協力者 A のデンドログラム

1) 左の数値は重要順位 2) 各項の後ろの ( ) 内の符号は単独でのイメージ

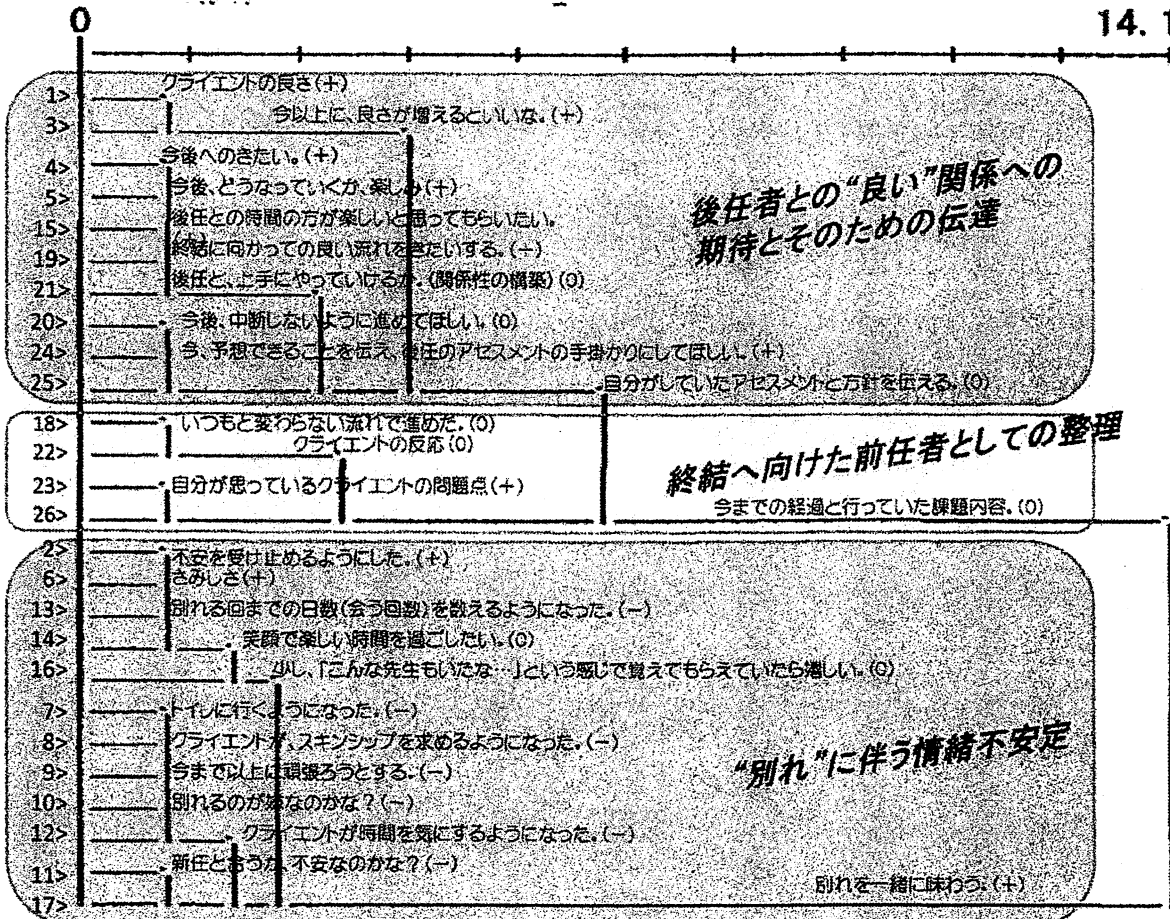


Fig.2. 協力者 B のデンドログラム (日本応用心理学会第 81 回大会発表論文集より)

1) 左の数値は重要順位 2) 各項の後ろの ( ) 内の符号は単独でのイメージ

# 一人暮らしの高齢者への支援体制

—訪問看護の専門家を対象とした PAC 分析—

○平塚久美子(東都医療大学) 内藤哲雄 平塚大智(福島学院大学)

key words: 訪問看護、地域援助、PAC 分析

## 目的

高齢化問題は現在、日本の社会の大きな問題となっている。同時に、家族と同居せず一人暮らしをする高齢者の数も年々増加しており、2014年現在500万人を超えている。そのなかで生活保護水準以下の生活を強いられている高齢者は300万人を超える。

このような現状に対して、多様な立場から解決策が論じられているが、上記のような高齢者一人ひとりを訪問して、彼らの生活習慣の向上を目指す訪問看護の専門家は、一人暮らしをする高齢者を訪問する機会が多く、かれらの抱える問題の解決策に関してヒントを得られる可能性が高いと考えられる。以上のような理由から、本研究では訪問看護に携わった経験を持つ人物を対象としてPAC分析を行う。

## 方法

**被検者**：50代前半、訪問看護に携わった経験を持ち現在は訪問看護の指導的立場にある女性。

**提示刺激**：提示した連想刺激は「一人暮らしで、収入が生活保護水準以下の高齢者が300万人を超えています。そのようないわば、漂流する老人たちの実態に対して、看護による支援が必要でしょう。地域看護の視点からは、どのような取り組みが可能でしょうか。それには、どのような対策や問題点が考えられるでしょうか。」

**手続き**：まずに一人暮らしの老人の地域看護に関して聞くこと、いつでも中止できること及び匿名に配慮し研究発表することを口頭及び文書にて伝え、了承を得た。

次に提示文は印刷した用紙を提示し、口頭で読み上げて教示した。さらに、連想反応のカードを重要順に並べ換えさせた後、各項目間の直感的類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し(分析ソフト：HALWIN)、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での連想イメージと+-0イメージの回答を得た。

距離 12.65

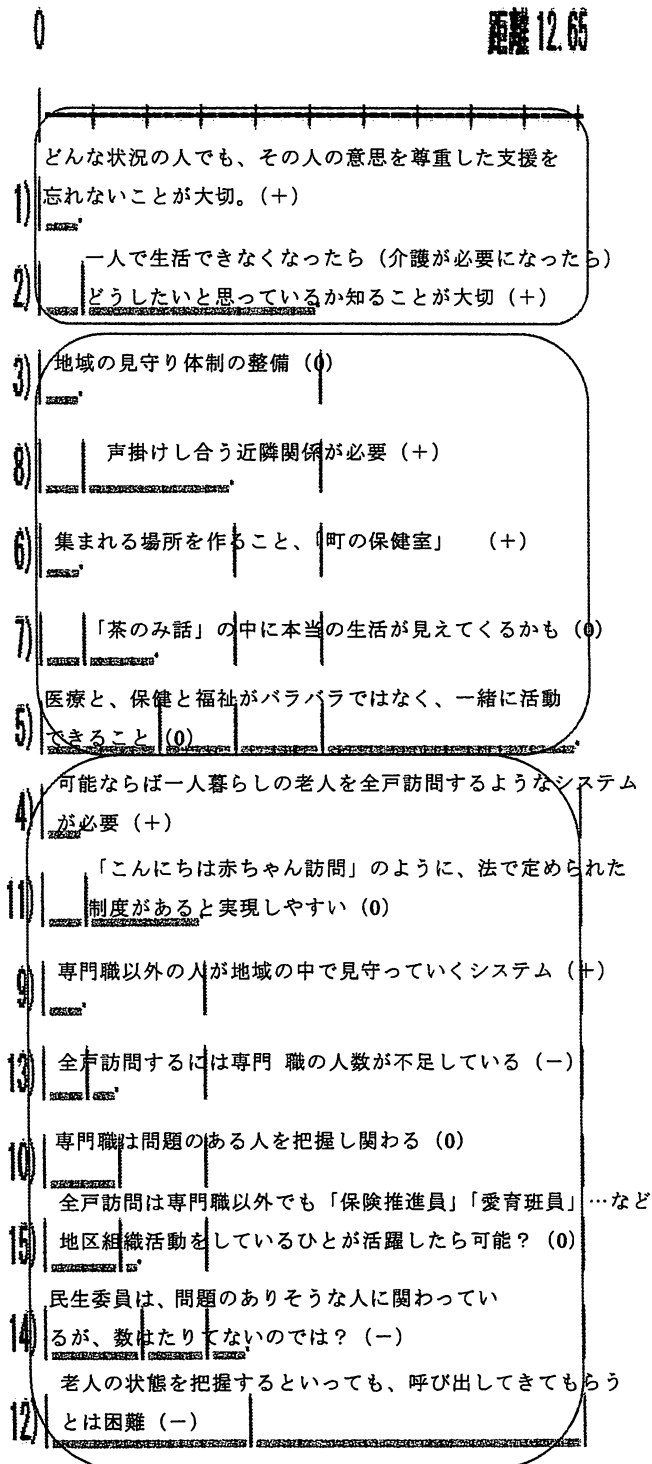


Fig.1 被験者のデンドログラム

- 1) 左の数値は重要度順位
- 2) 各項後ろの( )内の符号は単独でのイメージ

## 結果

### <被験者の解釈：一部抜粋>

クラスター1は「どんな状況の人でも、その人の意思を尊重した支援を忘れない支援を忘れないことが大切。」と「一人で生活できなくなったら（介護が必要になったら）どうしたいと思っているか知ることが大切」の2項目。「正解は、相手の中にある。こうしたらいい、ああしたらいいって勝手に決めることをしない。」「こっちから見て、これでいいのっていう生活でも、本人がそれでよければ、それで正解なんだろう。」など、支援に際し、本人の意志を尊重する必要性に言及した発言が見られた。

クラスター2は、「地域の見守り体制の整備」から「医療と、保健と福祉がバラバラではなく、一緒に活動できること」までの5項目。被験者の解釈。「どんなに、専門職が何かしようと思っても、やっぱり毎日の生活は近所が支え合うっていう姿が必要なんじゃないかなって思う。」という、近所付き合いの中での支え合いが重要であることを感じていると思われる発言がみられた。

クラスター3は、「可能ならば一人暮らしの老人を全戸訪問するようなシステムが必要」から「老人の状態を把握するといっても、呼び出してきてもらうことは困難」までの7項目。「やっぱり一人暮らしのひとには何らかの形で専門の人が関わるのが必要なんじゃないか。でも実際はそれは難しいとも思っている関わり。」など、専門家が関わることの必要性和限界に言及しながらも、「法律とか決まったものが、後押ししてくれないと難しいので、近所と専門家の中間みたいな人が活躍してくれるといい」といった非専門職の人たちの関わりの必要性に言及する発言もみられた。

クラスター間の比較については、クラスター1と2の比較では、「上のグループは、本人の意志の尊重、一言でいうと「本人」、下のグループは一言で言うと「周り」「本人が大事なんだけど、一人暮らしのひとは家族がいないので、本人の次に大事なのが周り、近所の人になると思っている。もともと周りとのつながりのある人はそのままいいんだけど、もし、無い人にはちょっとこうやってあげることも必要なのかな。」「近隣の付き合いがいやだって言う人もいるだろうなって思う。そうしたらなんかこう、

さりげない見守りも必要なんじゃないかって思う。」などの発言がみられた。

クラスター2と3では「真ん中のグループは、自然な生活の中での見守り、つながりを表している、下のグループは“トップダウン”みたいな、仕組みだからできるものを表している。」などの発言がみられた。

クラスター1と3の比較では、「収入が生活保護水準以下って課題を考えたとき、何か問題があるに違いないっていう発想が下のグループにはベースとしてあって、事実何か問題があるひとが多いと思う。一番のところで言いたいのは、それでもその人はそれでいいのかっていう難しい問題があるなって感じる。」「上のグループは、個人を尊重することを言っていて、主体は本人、下のグループは、周りがどう動くかを見ていて、主体は周り。」などの発言がみられた。

また全体について、「その人たちの力を活用しようという発想がない。やってあげる方に重点が置かれてる？イメージ」と述べられた。

補足質問では、項目1「いまってどんなサービスも、自分の申請でサービスを受けられるから、自分の意志で申請しない人っていうのもいるだろうなって、そんな時に意志を尊重するスタンス大事だけど、職業上ジレンマが起こってくるだろうなっていうイメージがある」

項目2「多分こういうことを聞くときっていうのは、すでにそれができなくなったときっていうか必要になった時に聞くことになるんじゃないかなって思うから、なんか本当は元気な時からうまくこう人間関係ができてて、それで事前に、聞いておくことができたらいだろうなって」

項目7「役所の人がいって話を聞く時じゃない、上の項目（項目6）みたいな場所で、お茶のみながら、ゆっくりしている時に、上のような内容が効けて一番上（クラスター1）のような内容が聞けるんじゃないかなって思うから、だからその親しい関係の先に、本当の話が聞けると思っている。」

項目4「あってしゃべる、しかも家庭訪問すると一目瞭然、ものすごくその人の問題って見えてくるので、何かその人が問題を持っているかどうかっていうのは全戸訪問っていうのは一番有効だって思ってる。もうほんとに生活している部屋を尋ねると言葉だけじゃないいろんな情報から、なんか生活って見えるんだよね。」などの発言が見られた。



## <被験者についての総合的解釈>

クラスター1については「どんな状況その人」であれ「意志を尊重した支援を」忘れず、支援者が「勝手に決める」ことをせず、「一人で生活できなくなったら（介護が必要になったら）どうしたいと思っているか知る。たとえば「自分の意志で申請しない人」や「すでに」自分の意志を表明「ができなくなった」高齢者に対しても「元気な時から」何度も訪問し「人間関係」を作っておき「事前に、聞いておく」などして、高齢者の意志を確認する。「高齢者本人の意志を尊重した支援」と命名できる。

クラスター2については「地域の見守り体制」を「医療と保健と福祉がバラバラではなく」総合的に「整備」すること。具体的には、「茶のみ話」のような関係や、「町の保健室」のような「集まれる場所」を作るなど、「声掛けし合う近隣関係」のなかで支え合うこと。「保健、医療、福祉を巻き込んだ地域の見守り体制の整備」と命名できる。

クラスター3は、「一人暮らしの老人を全戸訪問するようなシステム」や「こんにちは赤ちゃん訪問」のような制度を、「専門職」だけでなく、「専門職以外のひと」や「近所と専門家の中間みたいな人」がそれぞれ関わっていくこと。例えば、「全戸訪問するには専門職の人数が不足」しているので「専門職以外」の「地区組織活動をしているひと」が関わるなど。「専門家と地域の人の分業の提案」と命名できるだろう。

## 総合考察

クラスター1では、高齢者本人の意思を尊重して支援するという、看護の基本姿勢が影響していると推測される。これは、本人の解釈のなかでも繰り返し述べられている部分である。たとえばクラスター1と3の比較のところ、一人暮らしの老人たちについて「本当の意味でのQOLって何だろうっていう、自分の中にあるジレンマが見えてきた。」「そういう人たちがどうしてほしいのかっていうことを研究してほしい。本当にどうしてほしいのか。」といった発言が見られた。このことから、被験者の中でも、一人暮らしの高齢者の支援においても根本的に重要

な問題であると認識しているからであると考えられる。

クラスター2では、地域で一人暮らしの老人を見守っていくシステムについての提案がなされており、地域住民が1人暮らしの老人を見守っていくことが、高齢者本人の意思を尊重していくうえで重要であることを述べている。たとえば、クラスター1と2の比較において、「本人が大事なんだけど、一人暮らしのひとは家族がないので、本人の次に大事なのが周り」と発言しているように、本人の意志を尊重することの次に近隣関係の中で支えていく体制が重要であると述べている。また、項目2「一人で生活できなくなったら（介護が必要になったら）どうしたいと思っているか知ることが大切」に対する補足質問で、「元気な時からうまく人間関係ができていて、事前に聞いておくことができたらいい」と述べている事から、近所の見守り体制がクラスター1の本人の意思の尊重につながるものであることがうかがえる。

クラスター3では、非専門家のほかに制度や専門家を巻き込んだ支援を提案している。デンドログラムにおいてクラスター2の項目「こんにちは赤ちゃん訪問」のように、法で定められた制度があると実現しやすい、「全戸訪問は専門職以外でも「保険推進員」「愛育班員」…など地区組織活動をしているひとが活躍したら可能？」などの項目は、項目3の中でも言及されている「こんにちは赤ちゃん事業（乳児家庭全戸訪問事業）」を想定しての発言であると考えられるが、ここでは専門職と非専門職が、それぞれ役割を分担する必要性を述べているといえる。「こんにちは赤ちゃん事業」においても、子育て経験者などの非専門職の登用を行っている。さらに、クラスター2と3の比較のなかで「真ん中（クラスター2）は一般の人同士が主で下（クラスター3）は専門職が主であるけども、下（クラスター3）は、一般の人と専門職との中間の存在が動いていることに意味がある。だから共通していることは、やっぱり、どっかで見ていく必要のある人だと思っている」と述べていることから、クラスター2とは、支援者が非専門家か専門家かという点で違うが、誰かが高齢者を見守っていくという点では共通していると出ている。

以上のような内容から、全体として、本人の意志を尊重しようとする看護の姿勢と、近隣住民の見守り体制といった地域援助、福祉、それ

らを実現するための制度づくりといった複数の分野を包括した内容の支援体制が構造として表れているといえる。

さらにデンドログラムで、第1クラスター、第2クラスター、第3クラスターをつなぐ項目として、「医療と福祉がバラバラではなく、一緒に活動できること」が、象徴的な項目となっている。このことから、被検者本人のなかで、無意識的に、医療、保健、福祉を巻き込んだ包括的な支援が重要であると感じていることを示唆している。

### 結論

本研究は訪問看護の専門家の PAC 分析の単一事例ではあるが、デンドログラムからも、本人の解釈の中からも、医療と保健と福祉を総合した、包括的な支援の提案について、具体的な構造が出てきた。医療、保健、福祉個別の立場からの提案は、訪問看護の専門職以外の人からも出てくることは、考えられるが、それらを総合的にとらえることができるのは、訪問看護の専門家だからこそと言えるかもしれない。

(Hiratsuka Kumiko)